

特別企画 アカデミア編「ラボ立ち上げました」

特別企画によせて

藤原 伸介

本企画のタイトルを見て、ご自分の過去を思い出された方が多いのではないのでしょうか。文部科学省では、PI (principal investigator) は次のように考えられています。1) 独立した研究課題と研究スペースを持つこと、2) 研究グループを組織して研究を行っている場合は、そのグループの責任者であること、3) 大学院生の指導に責任を持つこと、4) 論文発表の責任者であること。また、PIは大学に限らず、公的研究機関のプロジェクトリーダーも該当します。若手でも大型予算を獲得された方はオープンスペースなどを活用し、PIとして研究室(ラボ)を持つこともあります。着任したもののスタッフや学生が少なく、研究のほとんどを自分で遂行しなければならないPIもいます。ただ、どのようなPIであれ、自分の「ラボ」を持つというのは、研究者の夢ではないかと思えます。私自身も約20年前に公募に応募し、やっと「ラボ」を持つことができました。立ち上げ時は、十分な機器もないなかで、粗末な器具を工夫して使い、価値あるデータを出してくれた当時の学生、博士研究員の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。最近では、若手研究者に「ラボ」運営を託す任期付ポジションやテニユアトラック制のポジションが増えています。JRECINなどの公募サイトでは、教授でなくても、講師や准教授で、「ラボ」を主宰できるポジションが多く見られます。また、女性の活躍を支えるために、女性限定の公募が出ることも少なくありません。かつては必ず見られた年齢制限も減ってきているように感じます。このように、PIになるための機会は多様化しています。一方で、大学の定員削減に伴い、応募から面接までたどり着くのも、容易ではなくなっています。

「ラボ」の立ち上げは、前任者の残した器具の片付けから始まることが多いのですが、いまはゴミの廃棄も一苦労です。また、以前は必要な機器を揃えるのも大変でした。最近ではリース制度の普及に伴い、最新の高額機器を備品登録せず、リース契約で導入することも可能です。少し古い機器であれば、ネットオークションで手に入れることもできます。遠心機からPCRまでオークシ

ンで揃うのは驚きです。このように「ラボ」立ち上げの経済的負担は、以前よりも格段に低くなっています。道具が揃うと次の課題はスタッフをどう集めるかです。そのためには自分の研究をいかに魅力的なアピールするかが重要になります。研究室配属では、優秀な学生を集めるさまざまな努力も必要でしょう。学生を集めることができても研究の運転資金(研究費)がなくては、「ラボ」はまわりません。大きな大学の研究室を大企業に例えるなら、ひとりで運営しなければならない小さな「ラボ」はベンチャー企業の町工場です。論文を書き続けなければ、研究予算は採択されなくなり、「ラボ」の運転資金は枯渇してしまいます。企業とタイアップすることで小さな研究室でも、資金を確保し、魅力的な成果が期待できる場合があります。生物工学は、どちらかという企業と共同研究を行いやすい分野ではないのでしょうか?ただし、企業では論文や学会発表よりも、特許や実用化に結びつく成果が求められます。企業から大学に移られると価値観の転換に困惑することがあります。また、教育研究の現場も、働き方改革で、子育て支援が叫ばれています。大学は支援をアピールして、優秀な女性を確保することに躍起ですが、果たして十分なのでしょうか?

今回の企画は、さまざまなケースで、アカデミア(大学)でPIになられた方々に、それぞれの体験をまとめていただきました。ご登場いただく方は、比較的最近PIになられています。任期満了と同時にスムーズに他の大学に移られた方、公募を出し、いくつもの最終面接を経て独立された方、民間企業、国立大学、私立大学を渡り歩かれた方、母として子育てをしながら研究室を立ち上げた方、ユニークな研究者養成システムを構築された方など、さまざまです。記憶の鮮明なうちに、お感じになったことを述べていただきました。年配の方には昔のご自分の経験と比べつつ、今の若手のがんばりを知っていただきたいと思います。また、今まさに研究室を持つとされている方には、ラボ立ち上げのヒントになる情報があると思います。魅力的な「ラボ」実現に向けて、今回の企画を参考にさせていただけると幸いです。